

令和4年度宮城県文化芸術振興審議会議事録

- 1 日時 令和4年6月3日（金）午前10時から正午まで
- 2 場所 宮城県行政庁舎4階 特別会議室
- 3 出席者
 - 出席者：志賀野委員、小塩委員、村上委員、佐藤委員、青木委員、玉淵委員、花田委員、赤間委員、斎藤委員、大澤委員、梶賀委員
 - 欠席者：渡邊委員、高田委員
- 4 議事 第3期宮城県文化芸術振興ビジョンの成果目標について
- 5 概要
 - (1) 開会
 - (2) 挨拶
 - (3) 出席者紹介
 - (4) 議事
 - (5) その他
 - (6) 閉会

6 議事内容

宮城県文化芸術振興条例第30条第1項の規定により、志賀野会長が議事進行を行った。

【議長：志賀野会長】

それでは、進行役を務めさせていただきたいと思えます。

今日もあまり天気が良くない中、お集まりいただきましてありがとうございます。

それでは進めさせていただきます。令和3年度から令和7年度までの文化振興ビジョンができたわけですけれども、それらについて既に皆様方からたくさんの貴重な御意見を賜っております。

今日はそれを踏まえた上で、さらに付け加えたいことや御感想を、委員の皆様方からお一人ずついただきたいと思っております。

その後でまた、御質問や御意見を伺う機会を作って進めてまいりたいと思えますので、よろしく願いいたします。

まずは、事務局より御説明をお願いします。

【事務局：黒澤課長】

それでは「第3期宮城県文化芸術振興ビジョンの成果目標について」御説明申し上げます。

資料1の「1. 成果目標の方向性について」を御覧ください。併せてお手元に、**参考資料1、2、3**も御用意いただけるとよろしいかと思えます。

参考資料1につきましては、昨年度書面開催しました審議会で、皆様からいただいた御意見をまとめたものになります。**参考資料2、3**は、その書面開催の時にお配りした資料で、**参考資料2**が他都道府県の文化芸術関連計画における指標の設定状況、**参考資料3**が宮城県で持っている様々な数値についてというものになります。これらを併せながら説明を聞いていただければと思えます。

まず**資料1**になります。1を御覧ください。「評価に影響を与える新型コロナウイルス感染症の影響」についてということで、まずこの影響について御説明申し上げます。

本ビジョン策定時には、新型コロナウイルス感染症の影響がここまで長期化するとは想定していなかったということもありまして、改めてこの文化芸術において、どのよう

な影響を及ぼしてしてきたのかを確認するため、簡単に整理したものでございます。

一つ目としまして、文化芸術の各種イベントの中止、延期、規模の縮小が、全国的になされたということがあります。また、これが長期化し、活動機会が失われたことにより、活動困難や雇用の喪失など、大きな影響が生じたということがまず挙げられるかと思えます。

二つ目といたしましては、文化芸術の鑑賞機会が減少したということがございます。自粛要請によるイベントの中止だけではなく、開催した場合でも入場者数を制限するなどの措置がありまして、結果的に鑑賞する機会が減少したというものになります。

また、地域芸能といった祭礼等の行事が中止になったことにより、伝承が困難になったほか、都道府県を越える移動の制限により、様々な芸術作品に触れる機会や交流機会が失われるなど、影響が多岐にわたりました。

三つ目としまして、運営上の対応の転換が必要になったということがございます。ガイドラインに沿った対策を講じるため、従来は必要のなかった新たな対応が求められたほか、オンライン配信などの新たな活動の場の広がりやオンラインチケットの普及など、運営上の様々な変化が生じたことが挙げられます。

新型コロナウイルス感染症については、いまだ収束が見えない中で、これらの影響は、縮小しつつも依然として継続している状況でございます。

これ以降、成果目標の方向性の考え方について御説明したいと思います。

お手元にお配りしております青いビジョン冊子をお開きいただけますでしょうか。

19ページから21ページまでについては、基本方針ということで、1、2、3と記載していますが、この中で一昨年度の審議会の議論を踏まえまして、例えば19ページを御覧いただきますと一番下の段落、「その進捗状況の把握に当たっては、下記アウトプット指標に加え、・・・アウトカム指標を用いた総合的な評価に努め、効果的な施策推進に生かしていきます」ということで、アウトプット指標のみならず、アウトカム指標の設定と申しますか、その辺について少し考えてみてはどうかと言うような御意見があったと伺っておりまして、このような記載になっております。

それが方針2、方針3も同じような書き方で、アウトプット指標は示されていますがアウトカムについてはこの策定段階では、決めてなかったというものであります。

しかしながら、先ほど申し上げましたとおり、コロナによる影響というのは多岐にわ

たっており、ここで示しておりますコロナ以前の取組や、成果によって正しく評価することは容易でないものと考えているところでございます。

資料1にお戻りいただきまして、昨年度、書面開催しました審議会で、皆様から頂戴した意見をまとめたものになります。

「2. 昨年度の審議会において出された意見」ということで、まず一つ目が「新型コロナウイルス感染症による影響」について、いくつか御意見をいただきました。

コロナ禍での文化芸術活動をどのように保障していくかなど、ウィズコロナを見据えた方策を新たに盛り込んでいく必要があるといった内容のほか、コロナ禍の中で数値による評価は意味がないであるといった御意見がございました。

次に、「評価項目」についてですが、居住する地域にかかわらず文化芸術を創造・発表・享受できる環境の有無について、県民の3割しか肯定的に捉えていないなどの御意見をいただきました。この県民が3割しか肯定的に捉えていないことについては、参考資料3から読み解いていただいたものになるかと思えます。また、活動指標の数値からどのような成果を導こうとしているのか検討が必要であるとか、どの事業にも共通した指標はどうかといった御提案がございました。

資料1の2ページ目、「指標の目標値」になります。

こちらに関しましては、数字というものさしで優劣をつけることが難しい分野であるとか、数値化されない質的な側面をどのように評価するかなどの御意見をいただきまして、文化芸術分野の数値による評価の難しさが、明らかになったところでございます。

その他「目標達成のための方策」といたしまして、持続可能な支援システムの構築が必要であるとか、文化芸術を振興する側の担い手の育成は文化芸術の振興に欠かせない要素であるなど、今後の事業展開に際し、参考となるべき御意見をいただいたところがございます。

この、いただきました御意見により、評価するにあたり想定される課題や方向性について、次の「3. 指標に係る課題と方向性について」を我々で整理してみました。

課題を3つ整理しております。

まず、課題1といたしまして、文化芸術に参画することは義務ではなく、期限もございません。そのため立場により目指す方向性も異なることから、客観性を確保することが難しいということが挙げられます。

これについての方向性として考えられるのは、細かく設定するのではなく、どの施策

にも共通する適切な指標を割り出して設定することが考えられます。

課題の2つ目としましては、事業内容によっては、目標を数値化させにくい場合があるということです。これについての方向性としましては、定量的な目標として、達成度ランクにより数値化するであるとか、行動やアウトプットも目標に加える、進捗や理解度を目標にするなどが考えられます。

他県の事例を見ましても、アウトプット数値の活用や、基準の数値から“増加させる”“いついつまで整備する”といった設定をしている状況がございます。[参考資料2](#)の他県のアウトプット、あるいはアウトカム指標の設定状況をまとめたものを、御参考ください。

3つ目の課題といたしましては、文化芸術による効果とは、豊かな人間性や心の滋養などの内面的な部分への作用であり、参加者数や来場者数だけでは測定することが困難である、ということでございます。

これまで、文化芸術に特化した長期的、継続的な意見調査等は行っておりませんでした。令和2年度に県が実施しております県民意識調査において、調査を行いました。今後、文化芸術に関する定点的な調査を行うことで、社会の変化に対応したニーズの変化などを捉えていく必要があると考えております。

次の「4. 成果目標の考え方」を御覧ください。

今まで説明しました内容を踏まえ、目指すべき成果を、事務局の方で整理した内容となります。

成果目標につきましては、受益者である県民の皆様への直接的な効果としての中間的なアウトカムと、ビジョン目標である最終的なアウトカムの2種類があると考えられます。

最終的には、この「最終的なアウトカム」を目指すべきところではありますが、成果が発現するには時間を要すること、また、今般の新型コロナウイルス感染症による影響を見ても御承知のとおり、様々な外的要因を受けやすいということが挙げられます。

このことから、県民に直接働きかけた効果としての「中間的なアウトカム」をベースとしまして、適切と考えられる成果指標を2つ挙げさせていただきました。

資料の3ページを御覧ください。

一つ目が「文化芸術は、身近なところで様々な分野に活用され地域の活性化に役立っていると考えられる人の割合」。もう一つが「居住する地域にかかわらず、文化芸術作品を創

作し発表や鑑賞を行う場が整っていると考える人の割合」です。

右の方に、令和2年度基準値として、27.5と32.3と記載しておりますが、こちら**参考資料3**を御覧ください。

資料1で御説明しました一つ目の「文化芸術は身近なところで・・・」というのが、**参考資料3**の1ページの2つ目になります。県全体の一番左の2.9%の『非常に役立っていると思う』と、次の24.6%の『やや役立っていると思う』、この2つを合わせて27.5%という数字が、**資料1**に書いている数値でございます。こちらの出典は、令和2年度に実施しました県民意識調査の結果になります。

成果指標のもう一つ「居住する地域にかかわらず・・・」については、**参考資料3**の4ページの一番下「10 居住する地域にかかわらず・・・」の3.1%と29.2%を足した32.3%が、直近で我々が把握している数字というものになります。

今申し上げた数値につきましては、令和2年度で既にコロナ禍にあった中で出された数値でありまして、果たしてこれを基準にするのが適切かという問題、あるいはマイナスの状況から回復傾向が見える中で、プラスに転じる現在の状況では、正しい数値は測れないといった課題もあることから、今期におきましては、我々としましては、具体的な数値設定は行わず、肯定的な回答の割合を「増加させる」方向性として、そのために必要な事業を展開してまいりたいと考えております。

要は、今申し上げました令和2年度基準値の27.5%、32.3%について、これを今回のビジョンの最終年度であります令和7年度に、50%にするとか60%にするとかという数値目標を作るのは難しいと思いますが、この数字は必ず上げるというような形の大きな方向性を示すレベルでの、成果目標あるいは成果指標というのを設定していければと考えているところでございます。

事務局からの説明は以上となります。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございました。

委員の皆さんの紙面での御意見と県の調査、それから各都道府県の指標の設定状況等も踏まえて御説明をいただきました。

これらにつきまして、これからのアウトカムというのは、やはり大事になりますので、肯定的な意識といいますか、それを高めていくということを当面の目標にしていくと。

数値化は元々難しいところがありますけれども、コロナ禍の中で少しその数値が作りにくくなっているという現状から、そのような方向であるという御説明だったかと思えます。それを踏まえまして、改めて御感想をいただきたいなと思えます。

それでは梶賀委員よろしくお願ひします。

【梶賀委員】

この数字やまとめを見ますと、愕然と残念だったなあという気持ちがとても強いのですが、実際にこの2年半、お客様を半分しか入れられないという状況の中で、それでも私どもはずっと公演を続けて参りました。

お客様を半分しか入れられないということ、それから1回ごとにシートを消毒したり、仮面を被ったりと、華やかさとは離れてしまったそのような異常な空間の中でメッセージを伝えてきました。表現者としてそれを上手に利用しながら、いつの日かあんな時代もあったと笑う時が来るねと話したこともありました。

このまとめを見て、コロナコロナと言っていますけれども、宮城県の場合は地震もあって県民会館が使えなくなってしまいました。こういう状況も、やはりお客様の鑑賞の機会をなくしていると思えます。

ただ、これからどうするかというときに、絶望ということは封印して、とにかく知恵を絞って、どういう方向に進んでいくかということを考えなくてはなりません。

高齢者が外に出ないということになって、これでお客様は随分減ったと思えます。これまで昼間の公演とか、そういうものを楽しみにしていた人たちまで、今回はクローズになってしまったということがありますので、そういうことを元に戻すのではなくて、新たにどのように活性化させていくかというのが課題です。

私達も知恵を絞っていきます。具体的に、失敗してもこういう方法でやっていくと、こういう成果が上がったと。これをプラスにしましょうというような考え方で前向きに、どうしようもない不条理を切り抜けていく方法を具体的に見つけて、実行していくことではないかと思えます。

【議長】

ありがとうございました。

数値を見ると厳しいけれども、前向きに取り組んでいこうということでございますね。

それでは大澤委員お願いいたします。

【大澤委員】

私からは、以前、意見にも書きましたけれども、少し私どもの仕事について御紹介をさせていただきます。

今、被災3県から、心の復興やコミュニティの形成ということで、私たちがいわゆる復興コンサートと呼んでいるミニコンサートのようなものの仕事をいただいております。

その中で岩手県の方でアンケートを取っております、先ほど申しました心の復興とか、コミュニティに関する、こんなにはっきり聞いて答えられるだろうかという内容をコンサートに来たお客様に対して聞いています。「参加者同士で交流はできましたか」とか、「気持ちが前向きになりましたか」とか、「孤立とか不安とかそういったものは低減しましたか」とか、心身の健康については答える方が分かるのかしらとは思っていますが、「自立的な活動の意欲が生まれましたか」など、全部で200人のアンケートでプラスの答えが多いということで、もちろんマイナスの、なかなかそういう気持ちにはなれないというのがありますが、つまり岩手県にしてみれば、この事業の目的は、今言ったように心の復興やコミュニティの再構築ということになりますが、現実的には割とこう前向きなお答えがまあまああつたりします。

目的がはっきりしていて、岩手県も宮城県もそれから福島県も少しずつ事業の名前は異なりますが、そういう仕事を支援していて、岩手県から審査メンバーが視察にいらして、とても良いと言われたりしております、つまり評価の議論として僕らの場合にはそういうものがあつたりします。

それから、芸術家派遣事業というのがありまして、私どももそこに参加しております。宮城県の実行委員会と仙台市の実行委員会がありますが、仙台市の実行委員会がコロナ以前にまとめたものに、先生方、つまり呼んだ先生方から見て、子どもがどう変化したかというのが、文章であつたり数字であつたりで出ています。

確かに全て数値化することができるとは思っていませんが、場合によっては数値化や、こういったその先生方の、子どもたちがこう変わったという文章とか、そういうものを読みますと、評価の仕方が全くないわけではないのではないかと考えております。

以上、紹介させていただきました。

【議長】

ありがとうございました。

震災復興のコンサートを通じて、前向きの回答というのも得られている、ということでもございましたので、意向調査についても、もう少し詰めた設問ややり方で、そういったものも取れるかもしれないというお話でした。

それでは、斎藤委員お願いします。

【斎藤委員】

私も自分の意見として、共通する指標を出すのはどうでしょうというのを出したのですけれども、今、大澤さんがおっしゃったことにすごく似ている部分があって、実際こういう芸術とか、心の中でのことを指標に出すのは難しいのですが、やはり分かっていたかなければいろいろとやっていくことはできないわけです。

では、その数値化できない部分をどのように表していくか。県の方の説明の中にあっただけの肯定的な意見を高めていくというところは上手く活用させていただいて、選択でどちらがいいとか、丸をつけるだけではなくて、大澤さんがおっしゃった岩手県のアンケートにある「具体的にどういうことですか」というところに注目して、もしそこがいけなかったら、「なぜそう思われますか」とか「変化がどのようなところに見られましたか」というようなところを入れていただき、そこからどうやって読み解いてデータ化していくかといったこともできるのかなと思います。

心の復興も含めて、本当に数値化だけでは絶対現れないものを、逆に、いろんな記述の言葉から、いただいていくといったことも必要ではないかなと思います。

私的には、長らく学校評価をやってきたのですけれども、やはりその記述式のアンケートから、いろんなものが見えてきます。

それをどのようにデータ化していくかというところで、次に繋がる効果、そして次のようにアクションしていくかも具体的に見てきましたので、このアートに関しては、やはり心というところがありますので、いろいろな読み解き方をしてデータ化していくかというのがとても大事になるのかなと思いました。

【議長】

ありがとうございました。

今のお話は先ほどに続きまして、アンケートというのを数値化するというだけではなくて、やはりもう少し突っ込んだ、第二、第三の質問なり、あるいは記述式という中からそういったものを拾い出すということもあるのではないかと、というような御意見でございました。

それでは、赤間委員お願いいたします。

【赤間委員】

赤間です。よろしく申し上げます。

私どもの施設でもアンケートを取っていて、斎藤委員のお話にもありましたとおり、マルをつけたり、選択したりするというやり方のアンケートに終始しているところもあるのですが、自由記述のところ、やはりいろいろな御意見があつて、そこは私たちとしても非常に参考になるところでもあります。

記述式のアンケートは、やる方も書く方も難しいところがありますけれども、数値だけでは測れないものを、どのように評価していくかという時に、ちょっと工夫が必要になるのだらうなと思います。

個人的には、単発的なリサーチではなくて、難しいかもしれないですが、継続的に1人の参加者がどのようにその意識が変わっていくか、ということを追っていくというのが、一つ重要なところなのかなと思います。

例えば、来た人にアンケートを配って、その意見を集約するというのもその一つの方法ですけれども、その取組がどのように浸透し、効果を上げているのかというのを見るときに、継続的にモニタリング的な人を選定して、いろいろな舞台を見て、だんだんこういうところが変わってきたとか、文化施設に足を運ぶことで、こういうことが変わってきているとか、そういうことを追っていくことによって、その取組の効果を測れるようなアンケートというか、モニタリングというか、指標の中にそういった視点があってもいいのではないのかなと思います。難しいことなのだと思いますけれども。

有識者なり、委員なりの評価も必要ですが、もっと一般的な市民の参加者の声を継続して拾っていく仕組みづくりというのがあると、より良いのかなと、単純な数の指標だけじゃないものが、そこから得られるのかなと思ったりしておりました。以上です。

【議長】

ありがとうございました。

まさにこの意識調査ですから、升で測って数で抑えるというのは、やり方として一番簡単だけれどもそうではなくて、個人がどう変化したのかというような追跡調査というんでしょうか、そういったものがあるといいんだけどもという、なかなかこれは調査するのは難しいかもしれませんが、例えばモニターというような方法というのが、ありはしないかと、このような御提案だったと思います。

では花田委員お願いします。

【花田委員】

花田でございます。よろしく申し上げます。

私のところの登米祝祭劇場という文化会館も、ようやくイベントが回りだした、普通にとは言えませんが、動き出しました。

昨年、あるいは少し前までは、もうイベントをやること自体が悪みたいな時期もありましたが、今は実施される皆さんも、鑑賞に来ていただく皆さんも、そういうような考えはなくなって、何とかやりたい、何とか見たいというようなことで、実際に動き出しまして、イベントができるようになって参りました。

そこで現場で感じますのは、実際にイベントを主催する人、出演する人、お客さん、全てがこういった活動を、皆、求めてきていると。このコロナで抑圧されている状況が、なおさらそういうことを感じさせるのだと思うのですが、何とかやりたい、聴きたい、見たい、出演したい、そういった文化活動を市民の皆が渴望しているというような状況が感じられまして、それを実際に実現するのが我々現場の仕事かなと思っています。

そういう中で、実際に文化活動をしようとする方にとっては、普通に出演する、運営する以外に、コロナ対策をしなければならない。ホール側もそうですけれども、文化活動とは違う、今現在の置かれている状況ならではの余計な作業といいますか、プラスの作業、文化とは少し違うジャンルの作業をしなければならないというようなことが待ち受けているわけですが、皆さんそれを理解していただいて、このコロナ対策をしなければイベント自体が成立しない、というようなことを、主催する側、鑑賞する側、双方が感じているのかなと。それが、この文化活動をこれからも続けていくということの、最低条件ではないのかなと感じております。

先ほどから具体的な数値目標というような話も出ておりますが、そもそもこの文化活動ですが、なかなか数値目標自体が難しいところもある上に、更に今コロナという状況ですので、私たちの現場でも、とにかくどうやったら活動できるのか、お客さんを多く入れられるのか、というようなことを試してやっているといえますか、少しおっかなびっくりのところもありますけれども、いろいろ試行錯誤しながらやっています。

そのような新しい生活様式ではありませんけれども、新しい文化活動様式と言うのでしょうか、それを今、いろいろな現場で模索してやっているというようなところですので、そういう事例をたくさん集めて、積み重ねて、そういったことをいろいろなところで情報提供したりして、こういうやり方ならできる、こんなことができた、あるいはこうすればいいとかですね、そのような事例を細かく集めていくというような作業が、数値目標に繋がっていくのかなという感じがしております。

頭から数値目標を設定するというよりは、そういう事例を重ねて、そこから目標値を目指していくというようなことは、できるのではないのかなと感じております。

どこの現場でもそういう難しい判断、難しい舵取りが迫られていると思いますけれども、市民の文化に対する意欲というか、求めているものは凄く熱いものがあります。

何とかそれに応えていけるような現場でありたいと思いますし、それに伴う数値目標なり、ビジョン目標なりというようなことの設定が必要かなと思います。

【議長】

ありがとうございました。

コロナ禍における何といいますか、パラメーターの変化といいますか、そういった中で、どのように潜在意識みたいな、機運を出すかということだと思っておりますけれども、事例を集合するというのも必要じゃないかという意見だったと思います。

次、小塩委員お願いします。

【小塩委員】

小塩です。

資料を拝見して、委員から出た意見であったり、あるいは県民意識調査であったり、様々なところから、まとめていただくことで、現在の状況というのが非常に明確に提示されて、理解できた資料だったと思いました。

思ったこととして、二つほど申し上げます。まず一つは、**参考資料3**です。ここに基づいて成果目標も出ていますので、お伺いしたいのですが、2つ目の方の設問「居住する地域にかかわらず、文化芸術作品を創作し、・・・整っていると考える人の割合」について、ここに現在示されているのは県全体ですが、この回答というものは、その居住している地域によって違うのかどうかというところを、もしお分かりでしたら教えてください。また分からない場合は、どういう形でこの県民意識調査の資料等で拝見すれば分かる方法があるのかを教えていただけたらと思います。

仙台市のようにホールが多数あるところと、ホールなどの施設にアクセスするのが遠くて大変なところで、意識が異なると思います。将来的な成果目標にしていくのであれば、現状として、どのように皆さんが考えているかについて、もう少し詳しいことが分かると良いかなと思いました。これが一つ目です。

2つ目はコロナの危機的な状況に対してです。今まで委員の先生方のお話を伺っていて、ホールのように業務として実施する立場、あるいはそのパフォーマーとしての立場では、環境が許されれば、どんどん積極的に機会を広げていきたいと考えていると思います。支援が必要であろうと思うのは、地域の祭礼などの自発的な活動の場や、見に行く・聴きに行くという参加者側に向けてです。人によっての意識も大きく違うと思いますし、コロナの状況が少し改善したからといって、その分一気に戻るというわけではないと思います。人によっては、まだ怖いと感じる人もいるでしょう。少しずつ戻していくタイミングは、コロナ前にそういう活動に積極的だった人はすぐに戻りましょうけれども、むしろそうではない人たち、あるいは逡巡している人たちに向けて、どのようにして活動に対して勧誘していくか、今の状況でもこういう活動があるという情報提供をしていくことが必要なことだと思いました。

【議長】

ありがとうございました。

今の小塩先生の御質問は後で、事務局で分かるのであれば答えていただきます。

地域別ですよね、いわゆる都市部と周辺部と言ってもいいかもしれませんが、そういうところの差異みたいなものを知りたいというようなことだと思います。

それから、支援の必要性として、受け手の差異、違いというんでしょうか、これが横たわっているのではなかろうかというお話がありました。

それでは、村上委員お願いいたします。

【村上委員】

宮教大の村上です。

まず、この文化芸術振興ビジョン第3期の方で、インクルーシブルな活動を含めたものであるとか、また特に2ページの方の文化芸術の範囲の中に、『社会芸術』という言葉として組み込まれました。

恐らく言葉としては、全国に先駆けて初めてではないかと思っておりますが、コロナ禍のことに関しては、まだ盛り込まれてなかったのは課題ではありますけれども、よくまとまっていると思っております。

コロナ禍において、まさにアートの世界は、非常に危機的な状況でした。公演ができないとか、展示ができないとか、人が集められない、ワークショップができない、できないことだらけだったと。そういう状況の中で世界的に見ると、ドイツでは、「アーティストは生命維持に必要な不可欠な存在だ」とモニカ・グリュッタース文化大臣が言ったくらい、芸術家が生活の中に根差していて、やはりこれを支援しなければいけないということで、いち早く打ち出して様々な施策をしています。そういうものが県としても、あったのだろうかということが一つ言えます。

またコロナ禍でも、様々な試行錯誤を美術館などもやっています。なかなか人が館に来られない、行けない場合には、バーチャルミュージアムで展開しようというようなことで、岡本太郎美術館であったり、森美術館であったりとか、いろいろ始めたところもあります。

そういう、できなければ、じゃあどういふことができるかというのを考えるのが、正にクリエイティブな活動であって、そういうものを行政も支援していく必要があるのではないかと思います。

いろいろリモートであったり、ICTを活用したものであったり、バーチャルなもの、メタバースみたいなものであるとか、そういうものも、今後可能性としてはあるのではないかと思います。

また、『社会芸術』というソーシャルアートですけれども、これも様々な活動ができると思うのですが、そういうものもビジョンに組み込まれました。ただ、言葉として入っただけではなくて、入ったからにはこの5年間の中で、そういうものに対しても助成金

なり補助金なりを付けるとか、やっている人を支援する、あるいはそういうものに関心のある人を、逆に東京でも他県からでも宮城県に来てもらって一緒にやるとか、社会の諸課題というのは様々あるわけですね。

環境問題であったり、福祉であったり、復興支援であったり、生活困窮者支援もありますし、あるいは不登校の子どもたちの居場所づくりであったりとか様々な活動を、創造的なアートの手法で解決に繋げるような活動をしていくというのがソーシャルアートですから、そういうことをいろいろとやっている人たちがいます。

そういう人たちをレジデンスしてやっていくとか、過疎化対策、空き店舗、シャッター街のものとかいろいろあると思いますけれども、そういうことにも参加するようなアーティストってたくさんいると思います。そういう具体的な取組みみたいなものも、これから積極的にやっていく必要があると思います。

また、それをハンドリングするようなディレクターであったり、あるいは組織体ですよ、アーツカウンシルみたいなものがあれば、そういうところでハンドリングもできるのですが、そういうことを意見書にも組み込んでいます。

とにかく文化事業というと、美術館があります、文化施設がありますという、そういう箱物があると安心してしまう箱物信仰がありますが、これからはそういうものも必要ですが、それだけではなくて、その企画力であったり、ソフトであったり、あるいは誰がそういうものをディレクションしているのかとか、それは国際展もそうなんですけれども、あいちトリエンナーレだったら、これこれこういう人がディレクションしているとか、リボンだったら、小林武史さんがいたりとか、和多利さんがいたりとか、窪田さんがいたりとか、そういった人たちがいると、これすごく面白そうだなとか、行ってみたい、みたい、感じになるわけですね。

それは美術館とか文化施設も同じで、そういう公募の館長さんであるとか、そういう形でソフトの方にシフトしていくような、そういうことも必要なんじゃないかなと思います。

アンケートの方でも、意識意識調査のアンケートでは、文化芸術の果たす役割が大切だと、大半の人がそのように思っています。それに対して、担い手が育っているかについては、非常に否定的ですね。地域の活性化に役立っているかというのも非常に低いですね。

そういう鑑賞する機会が整っていないというか、否定的な印象を持っている方が多い

というのが分かったのですけれども、じゃあ具体的にどういうことをやっていったらいいのかというのを、正にこういう場でも、今後考えて行く必要があるのではないかと思います。

何度も言いますけれども、クリエイティブな活動をする若い人たちは、結構いるわけです。宮城野高校さんもそうですけれども、でも美術大学というものもないですし、いろいろな人たちが他県に行ったり東京に行ったり、行くのはいいんですけれども、戻ってくる場所がない、働く場所がない、そういうこともあると思います。

そういった人たちを受け入れるとか、あと持続可能な支援として、ふるさと納税みたいなものがあるのであれば、物をただ還元するのではなくて、プログラムとして組み込んで、そういうものに直接的な支援をするような仕組み、ふるさと納税の FOR ARTS 版みたいなものがあれば、NPOとかいろいろな社会活動されている、音楽での心の復興もそうだと思いますけれど、そういうものに直接こう税金の一部が行くみたいな仕組みは、そんな難しい話ではなくて、できると思います。

そういう具体的な方法みたいなものをきちんとやって、アンケート調査もネット上でもできると思いますし、指標につなげていければいいのではないかと思います。

【議長】

ありがとうございました。

大変広範なお話で、文化芸術そのものの概念の拡張というか、そういうことがどんどん起こっている、その代表的な言葉とフレーズとして社会芸術と、こういうお話がありました。

また、それを成果なり指標なりに当てはめてみますと、そういった拡張する文化芸術の概念に対しての、指標というのもまた変わってくるのかもしれませんがね。そういったことも併せて考えていかななくてはならないのではないかと思いますと、それから、それを支援する仕組みなり、担い手の問題ということも御指摘をいただきました。

では次に、佐藤委員お願いします。

【佐藤委員】

宮城野高校の校長の佐藤と申します。

昨年度から委員に加えていただいていたのですけれども、実際的には、今日が皆様と

お目にかかる初めてということですので、少し私の背景をお話しながら、お話申し上げたいと思います。

宮城野高校には、高校生の文化部をまとめる高等学校文化連盟の宮城県の事務局が置かれている関係で、宮城野高校の校長が充て職という形で、高等学校文化連盟の会長を仰せつかっております。

高文連は全国組織ですので各都道府県にあります、そこで高校生は年に1回、全国の文化祭というのをやっています。

今年度は、7月の末から8月の頭に、東京で開催される予定になっております。

昨年度は和歌山県、その前は高知県での開催でした。コロナの影響がありまして、高知県で開催された全国高等学校総合文化祭は、集合開催を止めてオンラインという形になりました。

それも全国で初めてというような企画になって、それはそれでいろいろなことができるということが分かり、新しい可能性が広がったことではありましたが、昨年の和歌山県は、コロナの中ではありましたが、感染予防対策を講じて集合開催で実施されました。

大体、全国2万人位の高校生と教員が集まるということで、私も和歌山に行きましたが、学校の授業だけではなくて、会議であるとかいろいろなことがオンラインで行われるようになって、できることが増えたのは間違いないのですが、やはりオンラインよりも集合開催、対面、リアルが良いなというのを感じてきたところでもあります。

それで、私自身は、宮城野高校の校長が今年2年目ということになりますが、過去に県の教育委員会の生涯学習課にいたことがあり、それがちょうど震災の前後3年間のタイミングで文化関係を担当していたものですから、実はこの審議会の方にも1度だけ出席をしたことがあります。なので、今お集まりの委員の皆さんにも、その時にお会いしたことがあるかもしれません。

そこで、震災の時に文化関係の教育委員会の窓口になりましたので、例えば、芸術家派遣事業が立ち上がったたり、仙台市の実行委員会、宮城県の実行委員会、それにも立ち会わせていただきました。あるいは文化庁が行う通常の芸術家派遣事業の取りまとめなども行っておりました。

昨年度は書面で意見集約ということでしたので、高校生に関わる立場で、少し意見を書かせていただきました。皆様の発言の中にもありましたが、私がやはり大事だと思っているのが、部活動ですね。文化部活動、運動部もそうですが、「人の繋がり」と、それ

から「場」というものが必要だと思っています。

場は、いわゆる先ほど箱物というお話もありましたけれども、やはり施設というものがないと、なかなかやりにくいというのがあります。

ただ、施設があってもそれを企画する人であるとか、集団や機会、そういったものも同時にないとなかなか活動が活発化しないだろうと考えております。

その観点で、先ほども御指摘がありましたけれども、県民意識調査の32.3%という数字について、仙台市だけを取り上げたらどうなのだろうかということを思いました。

文化部活動をいろいろ見ていく中で、県内各市町村を巡ったりしますが、当然、大きな施設を持っているところもあります。そうでないところもあります。その枠の中でどのような活動ができるのか。物理的な制約、そういったものも当然ありますし、あとは交通インフラ関係で集まりやすい部分などもあると思います。

そういったところを考えたときに、県民意識調査は、県民を漏れなくカバーしているものだろうとは思いますが、やはり仙台市だけを取り上げたら違う数字が出てくるのではないかと思うところがありまして、ですから逆に、仙台市以外の市町村を見たときには、具体的にでは何が必要なのかというのは、また違う目線があるのではないかと感じているところがあります。

今日の話ではないと思いますが、県教委にいた時も思っていました。やはり行政的な縦割りがあって、仙台市に関わる方々もいらっしゃいますけれども、行政的にも県と仙台市が別々に動いているというところがありますので、そのあたりの統合というのはなかなか難しいとは思いますが、できないものかというのは常々考えておりました。

そんなことで、今考えているのは、先ほどもいくつかお話がありましたけれども、高校生もできることが増えてきて、やはり参加した生徒たちの感想は、やって良かった、参加して良かった、その場にいられた良かったという声は沢山あります。

その瞬間の感動、あるいは変容というのもすごく大事だと思っていますが、先ほど提示された、成果目標の具体的な数値目標については、数値目標ではなくて増加の指標という形で使いたいという発想については、いいのではないかなと思っていますところ。です。

なかなか、どのようにとらえるかという切り口が、難しいところはあると思いますが、高校生が人生の長いスタートをこれから切っていく中で、その文化芸術活動が盛んになって、豊かな人間性を培えるように支援したいと考えております。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

【議長】

ありがとうございました。

高校の文化活動というか、そういう観点でのお話がありました。

指標等についてはよろしいのではないかっていうようなお話だったと思います。

それでは、青木委員お願いします。

【青木委員】

宮城県文化振興財団の青木でございます。

まずもって、梶賀委員からもお話がありましたが、県民会館の館長として、この2年間、コロナと地震の影響によって、開館期間の方が少ないのではないかとと言われるような状況であることに対して、お詫びを申し上げたいと思います。

特に今年度はイズミティも長期改修に入っておりますし、間もなく多賀城も短期ではありますが、改修に入ってくる中でございます。

1日も早い大ホールの復活に向けて、今のところ9月末ぐらいまではかかるのではないかと考えておりますけれども、進めてまいりたいと考えておりますので、引き続き御愛顧の程よろしくお願ひしたいと思ひます。

それではまず、感想的なところからお話をさせていただきますが、この2年間、コロナ等でできない中でも当文化財団としても、文化公演やアウトリーチをさせていただいております。

大澤委員さんや、皆様からもお話がありましたけれども、参加した方々からは非常に高い評価を得ておまして、充実度・満足度もとても高い、ぜひまたこれをやって欲しいという意見ばかりが上がってきているという状況でございます。

そういう意味では、逆に言うと、参加できる人の数をいかに増やすか、劇場や場所にいかに足を運んでいただけるか、というところを増やしていくというのが、数値が上がっていく前提になってくるのではないかと考えております。

参加できない方々の意識をどのように捉えるかという意味でも、逆にこの御提示いただいております県民意識調査のように、参加する人と参加しない人も含めた県民全体の意識を定点的、定期的に捉えられる数値を使うというのは、一ついいことなのではないのかなと思っておりますし、他の委員からもお話がありましたが、この中で具体的に

何%ではなくて、数値をアップさせるということを目標とする、ということもいいことではないかなと思っております。

ただ、1点だけ成果の項目を見て、感じることでございますが、設問の取り方は少しどうなのかな、と思うところであります。

県民意識調査という行政がやる設問だということで、やや硬い印象がございまして、「文化芸術は、身近なところで様々な分野に活用され地域の活性化に役立っている」と。自分が文化活動をしたことで、これが地域の活性化に役立っていますというところまで考えて活動している人はなかなかいませんので、このように聞いてしまうと非常に、意識的に狭い話になってしまうのではないかなと思っております。

期待される効果の方を見ますと、身近な生活に良い影響なり効果があるという意識、すなわち自分の周りの環境や自分自身にとっての効果ということに対して、設問では地域の活性化まで役に立つとされているため、人口が増えるとか経済的に潤うとかですね、そういったところを捉えてしまうようなことがあるのではないかなと考えています。

設問は、多分ずっとこれで通ってきているので、なかなか変えるのは難しいかもしれませんが、プラスアルファの説明を加えるなどによって、この「地域の活性化」を硬く考えないようなイメージを持ってもらえる設問の仕方というのを、考えていかなければならないかなと思っております。

それから2番目の「居住する地域にかかわらず、文化芸術作品を創作し・・・」という方のお話ですけれども、子どもがこの県民意識調査の対象になっておりません。

子どもについては、大澤先生とかいろいろなところの御協力で、アウトリーチとかがたくさんあって、保育園、幼稚園、小学校、中学校、様々な機会を通じて、いろいろなグループ活動を体験していただくような授業をやっておりますし、高校については高文連さんの方でもいろいろ活動されているのだと思いますので、大人の方々に対して、どのように関わっていくのかというところが、大事になってくるのだと思います。

こうした中で、各市町村には必ず核となる文化施設というものがありますけれども、今日来ていただいている、えずこホールさんや、登米祝祭劇場さん、仙台市とかは別に、小さな館では、なかなか自主事業をやるような人も、予算も、ネットワークもないというような状況になっていて、そこが今一番大きな課題かな、と考えているところでございます。

これについては、全国公立文化施設協会の方でも課題と考えておりまして、今ワーキ

ンググループを作って、いわゆる中小館と言われるところの活性化をどのように図っていくのかを課題として取り上げて研究活動を行っているところでございますが、私ども文化会館としても、そういった意識を高めながら、この数値のアップに取り組んでいきたいと考えております。以上です。

【議長】

ありがとうございました。

参加者、鑑賞者の増加というのでしょうか、割合というのは、これは全国の調査を見ても、アウトカムで指標とされている、いわゆる鑑賞人口の増加、それからもう一方で、活動をしている人の増加、これ二大指標ですよ、これはやはり外せないのではないかと思います。

それから意識調査でございますけれども、この設問の仕方というところで、特に2のところは私もそう思いましたけれど、地域活性化に役立っているか、といきなり聞かれると、なかなかこれは前向きに答えるのは大変難しいかもしれませんよね。そのような御意見がありましたし、それからそれぞれの中小館というところでの、あまりノウハウと人員がないところに対する、指標というよりは方策というのは必要だと、こういうお話でございました。

それでは、玉渚委員お願いします。

【玉渚委員】

えずこホールの館長をしております。どうぞよろしく申し上げます。

現場で担当もしておりますので、今の状況を少しお話させていただきたいと思っております。

2020年、2年前になりますが、やはり事業はなかなか厳しい状況でした。それでもとにかく事業はやるという方針を崩さずにいました。それは、ずっとコロナ禍において感染対策は徹底した上で、やれることをやるということでの方針でした。

内部には批判的な方々というのもやはりいて、そういう方々ともちゃんと向き合って話をしながらやりました。

2020年度は2事業、2公演。大小の事業含め全体ではそれでも325回（主催、共催事業）の事業を実施しました。そこそこはやれたかなと思っておりますけれども、2021年は12事業、全部で14公演、全体では411回事業を実施し、公演に関しては計

画した全ての公演を実施することができました。

この間は幾分共催系の事業では、主催する側の判断で実施できなかったのですが、ホールが主催して判断できるものは、延期に延期を重ね、チケット制を断念しても、入場者からのカンパ金でやるなど、苦慮しながらも開催した公演もありました。

印象から言いますと、今の仙南の圏域の中では、コロナが怖いということが定着してしまっていて、活動ができず、なくなってしまった団体もあるようです。

ただ、えずこホール側から見える方々、団体に対しては、積極的にアプローチをして、細々とでもやりましょうということで、ただお話をするなどのコミュニケーションを続ける対応もしました。団体によっては、活動は止めたけれども団体をリニューアルするというような事務上の動きは止めずに過ごした団体もありました。今は、だいぶ活動も戻ってきたなという印象です。昨年には、事業数にして例年の大体3分の2くらいまで回復してきたのかなと思います。

本題の話ですけれども、個人的には文化・芸術の分野は、モヤっとしていて、余白がある、遊びがある方が、やはりいいなと思っています。常にそうはいきませんけれど。

資料3のところで、先ほどの設問の硬さという点は、自分もそう感じました。えずこホールも、こういった内容のアンケートを取っているのですけれども、実は、2年前の事業をやっていた時の方が、非常に数値が高かったです。昨年の事業をやった結果の数値見ますと、肯定的なポイントが減少しました。これは、日常にだいぶ戻ってきたことに関連するのだらうと思いますが、今後検証していきたいと考えているところです。

アンケート結果で見ますと、先ほどの余白の部分ではないですが『どちらとも言えない』というようなポイントというのが半数近くもあって、やはり気になります。余白があり過ぎるというか。例えば文化芸術が地域活性化に役立つか、などの設問に対し、『分からない、どちらともいえない』という回答です。設問の仕方や質的なものもあるのかもしれませんが、ここはもう少し、どちら寄りなのかというのを見極められるようになったらと思います。

スポーツでいいますと、スポーツはもの凄く期待感のようなものがあって、勢いがあるという印象です。でも、文化芸術は昔より勢いがないような気がしていて、これらを指標化できるかは分からないのですが、いずれ期待感・期待度というか、何かワクワクするということが昔は結構あったように思います。

私は、この仕事が長いですが、初めに入った頃は、すごく周りの担当者の皆さんの目が爛々と輝いて、どこか前のめりになっている感じる時代がありました。

今は、もの凄くコロナの影響や社会情勢など、いろいろなことを真面目に考えるというようなことが結構多いと感じていて、真面目に考え過ぎるあまり、何と申しますか、ワクワク感というのを後回しにしているのかなと思っています。例えば、中間のアウトカムというか、段階的に結果となる直接的効果の手前に目標を作って、答えを得ることを目的化せず模索していくことが、大切なのではないかと考えています。

これについては、社会的な構造から、文化芸術の分野に留まらないさまざまなジャンルにアプローチし、ソーシャルアートとしての取り組みをコツコツしていかなければと思っています。

えずこホールが仙南圏二市七町の中核施設としての役割をぶらさずにやってきたことは、地域社会にどのようにアプローチしていったらいいのか、先代の館長とも一緒に考えてきたことです。こうしてやってきたことが、地元でのアンケートのポイントが、思ったより高くなっているのだと思います。地域活性化や地域づくりに役立つなどの硬めの設問ですが、肯定的な回答が7割位になっています。(あくまで事業アンケートの令和2年度集計の結果ですが。) こうしたアンケート結果に対しても、きちんと検証して、広域的にもお役に立てたらと考えています。

お話の繰り返しになりますけれども、もっとワクワクするようなことに繋がるのは、最終的に事業です。その事業を継続し、積み重ねていった結果、社会全体での評価が降りてくる。長期的にはそういう順番なのかなと思います。

【議長】

はい。ありがとうございました。

えずこホールという、県内で屈指の事業の数を誇っている施設からの御意見でございました。

ただ時代の空気が変わってきたと、こういうお話もありましたし、それから設問で“どちらでもない”という答えの解析が必要だと、こういうお話でした。

さて、時間がオーバーしてしまいましたので急ぎたいと思いますが、小塩先生からいただいた質問について、最初にお答えができるのであれば、事務局お願いしたいと思

ます。

【事務局】

はい。

この県民意識調査、県の企画部で行っているものですが、結論から申し上げますと、七圏域単位で分析していると思います。

ただ、公表しているかどうかは定かではありませんが、少なくとも我々は県庁内部の職員ですので、データを貰いまして少し分析してみたいと思います。

おっしゃる通り、いろいろな施設が偏っている仙台市とそれ以外のところで、多分変化が見えてくるのではないかと思います。

また結果を見て、もしかすると新たな施策が我々としても考えられるかもしれませんので、まず調べてみて、公表できるものであれば、場合によっては委員の皆様にも、こういう結果でしたという形で御連絡申し上げたいと思います。

【議長】

ありがとうございました。

小塩委員よろしいですか。

【小塩委員】

ありがとうございます。

【議長】

それでは分かり次第、公表できるものがあれば、教えていただけるということでした。

今回は指標、アウトプット・アウトカムについて、目標と成果ということなんですけれども、これを巡って、様々な御意見をいただいたところでございます。

要は、大きくはその目標にせよ、成果にせよ、その数値化がどこまでできるのかというのが一つ課題でありますし、それからその主観というか、いわゆる意識調査の部分もですね、いろいろな御提案ありましたように、いろんな方法があるのかなという話が出てきたと思います。

それと、私から今まで出なかったこととして少し申し上げますと、全国の指標の設定状況を見ますと、どちらかに偏っている状況があります。アウトカムだけを書いているところ、両方書いているところが逆に少ないという感じでございます。

その中で、やはり数値をきちっと目標として書いているところと、意識調査が入りまじっているところと、両方ありますね。この辺の整理も、やはりする必要があるのかなというような思いが一つ。

それからもう一つは、今度の法改正の中で強調されているのは、観光だとか、いろいろな他分野に対しての、文化芸術の活用ということですが、そういった意味で、その新しい指標っていうのは圧倒的にないかと、全国なかったんですね。その中で、京都で文化のGDPという部分が出てきました。

それから、経済側面を書いているところが散見されました。そういった部分について、県の方でも今後、考えていく必要があるのかなという気がいたしました。

それから、何よりも文化芸術というのは、どうしても一つの指標で、先ほどの代表的なもので言えば、鑑賞人口の動向等、それからする人口の動向というのが、一つ大きな指標になっているのですけれども、それ以外の指標の多様化というのでしょうか、これがむしろ文化芸術にとっては必要で、なかなか一つにまとめることができないというか、それから漏れ零れるというかそちらの方が多い、というところがありますので、その辺を今後どうするのかなとも思います。

実は、でも、県の指標というのはすごく細かくて、いろいろな指標が網羅的に書いてあるわけですが、先ほど申し上げましたような、文化芸術に直接分野として、今まで対象化してきたもの以外の部分もですね、今後は、指標になっていくかもしれないと思うというのが、私の感想でございました。

この後の報告もありますので、そこでまた御意見なり質問をいただくということにして、議事進行としましては、皆さんの御意見を一通りお聞きしたというところで、閉じたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

では、事務局にお返ししたいと思います。

【事務局】

本当に、多岐にわたる貴重な御意見、ありがとうございました。

令和4年度は、お示しした成果目標2つで、一旦走りたいと思っております。

ただ、アンケートにつきましては、今年の秋以降に取ろうと思っておりますが、手法としては先ほどのお話にもありました、単に良い悪いとか、そういう選択方式ではなく、自由記入欄に書いて貰えるよう、令和4年度は分かりやすい設問にするなど、少し手法を工夫させていただきたいと思います。

また、その結果は、何らかの形で皆様にもフィードバックするとともに、本年度やってみて不具合があれば、また相談させていただきたいと思います。

やはり他県の状況を見ましても、文化芸術に関する目標設定というのは難しく、他の都道府県も試行錯誤を重ねている状況だと思います。

我々も、国や他県の動向、あるいはそのアンケートから見えてくる、県民の皆様がどのように考えているか、こういうものを少し試行錯誤しながら、可能であれば令和8年からのビジョンとなりますけれども、その頃にはコロナもある程度落ち着いて、元の状況に戻っていたりすると、また違った目標の立て方だとか、数値の作り方とかができると思っていますので、今期は今回決めた内容で、もうこれ以上何も議論しませんということではなくて、我々や皆様が気づいた疑問点をどんどんぶつけていながら、次期ビジョンの策定に向けた過渡期として、目標指標について議論させていただきたいと思いますので、引き続きの御助言、御指導をよろしくお願いいたします。

【司会】

志賀野議長ありがとうございました。

委員皆様も貴重な御意見ありがとうございました。

それでは次第の「5. その他」に移ります。

事務局から3件の情報提供を行った。

【司会】

その他、委員の皆様から何か御意見、御質問等はございませんでしょうか。

それでは、以上をもちまして、令和4年度宮城県文化芸術振興審議会を閉会させていただきます。

長時間にわたり、御審議いただき、ありがとうございました。